

【随筆】

コロナ感染症が止まりませんね

住 吉 尚

(釧路支部)

コロナウイルス感染症が騒がれ始めた頃は、トランプ大統領ではありませんが何となく夏になれば…とか、秋までには…とか思っていました、10月になっても、講習会、研究会、どこか理事会まで開けないでいますよね。北獣の12月の理事会には出席したいと思っていましたが、札幌での感染者が急増しているのを見ると、不安がありますが、どうしたのでしょうか？各種会議もなく、研修会、講習会も開けないので、我が釧路支部の事務員も手持無沙汰と言ったありさま。開けたのは中間監査だけです。皆さんはどうお過ごしですか？

9月前半は大変な暑さでした。何でしょう！8日火曜日は天気が良くなりそうなので釣りに出かけてみましたが、あまりの暑さにへこたれて早々に帰って来ました。全国一涼しい街と言われている釧路でさえ暑かったのが、皆さんがお住いの所では大変だったでしょうね。でも季節は秋、そろそろ渡り鳥の移動のシーズンです。まず目につくのはカモ類です。風蓮湖、厚岸湖、塘路湖、シラルトロ湖など、釧路周辺には沢山の湖があります。あまり遠くなく、湖畔から観察もしやすくなれば、シラルトロ湖や達古武沼などがお勧めでしょう。すでにカモ類が渡ってきています。遠くてゴマ粒のような群れでしたので種類までは分かりませんでした。小型のカモ類の大群が見られるようになり、今月の中旬を過ぎると大型の



飛び立つヒシクイ

ヒシクイが渡ってきます。ハクチョウが渡ってくるといよいよ晩秋と言うことでしょうか。

この時期には北海道で繁殖した夏鳥も南へと移動していくのですが、いなくなる鳥は特別な機会がなければ観察できません。色々な鳥に足輪を付けて放すと言うことをしている人をバンダーと言いますが、この人たちは秋に大群になって南へと渡って行く夏鳥がたくさん獲れるので、足輪付けが大変忙しいのだとか。ここ道東で霞網にかかる小鳥で最も多いのはアオジだそうです。場所によってはノゴマが大量にかかるということもあるとか。先日ラッコを見ようと霧多布岬の遊歩道を歩いていると、目の前の小道を小鳥が1羽ちょこちょこと私の前を歩きます。写真に撮り拡大して見ると、これがノゴマの雄の成鳥でした。繁殖期には良く草原の草のてっぺんでさえずっているのが見られますが、なかなか良い状態で写真に撮ることができていなかったのが、ラッキーでした。



ノゴマの雄

大型のタカの仲間などは日中悠々と渡っていきますが、小型の鳥たちは捕食者であるタカ類がいない夜間に移動していくのであまり人目にはつきません。私が若い時に勤めていた登別のクマ牧場は、標高が600 m近い山の上にあって、室蘭の測量山が間近に見え、その向こうに恵山岬まで見える所でしたので、秋にはメジロやヒヨドリが大群で現れ、タイミングを見て渡って行くのが観察されたものでした。小型のカモ類も突然湖に現れるので、やはり夜間に渡ることが多いようです。里の秋という童謡に「鳴き鳴き夜鴨の渡る夜は」という歌詞がありますが、今では家の造りも違い、街の騒音、テレビの音、冷蔵庫のモーター音など、限りなく騒音に囲まれているから、こんな音が聞こえるということもありませんね。これは多分昭和19年の秋の風景でしょう。現在の我々には想像もできないほどの静けさだったのでした。小さな

子供と2人だけの夜を過ごす若いお母さんの心細さ、寂しさが胸に迫る歌ですね。二度とこんな思いをする人が出ない世が続きますように。などと物思いに更けるのはやはり秋なのでしょう。話はそれますが、この歌ができ上がったときは終戦となっていて、一度は没となったものだと言います。でも終戦から4カ月後、南方からの引き上げ船が帰ってくることになりました。それでこの時の、今風に言うの特番のテーマソングに3番の歌詞を替えて流したのだそうですね。そのため「里の秋」と言う歌なのに、3番は「さよなら、さよなら、ヤシの島…」となっているのだと言います。ちなみに替える前の歌詞は、子供に「大きくなったら国のために…」と言わせるような意味だったとか。

釧路方面から行くと十勝川河口橋の少し手前に、見逃してしまいそうな小さな橋があります。十勝川方面へ走っていると、この橋の右側にこれまた小さな沼があります。なぜかこの沼はラッコ沼と言う名がついています。名前の由来は分かりませんが、9月12日にここを通った時には10羽ほどのガンを見ました。確認しようとするすぐに飛び立ったので種類までは分かりませんが、今秋の初飛来でしょうか？私のこの秋の初認です。ほかにはマガモが20羽ほど見えました。昨年は9月14日にシラルト湖でガンがヒシを食べているのを見たのが最初でしたから、気温が少々高かろうが低かろうが渡り鳥はほぼ同じ時期にやってくるようです。カモの仲間は捕食者の眼を逃れるため夜間に渡ることが多いのですが、ガンの仲間は大きな鳥ですから、これを捕食する動物はあまりいません。そんなことからでしょうか、ガンの仲間は明るいうちから渡って行くことが多いので、国定忠治が「雁が鳴いて南の空に飛んでいかに」と言い、土井晩翠が「鳴きゆく雁の数見せて」と言ったのでしょうか。「カギになりサオになり渡る雁…」も「カリガネはるばる」もありますね。でもどの風景を想像してみても夕方の風景が想像されますね。やはり昼間に渡るのは遠慮しているのでしょうか。

9月も中旬になるとやはり気温が下がってきましたね。9月8日はあまりの暑さにへこたれて釣りを中断して帰ってきたと書きましたが、14日には厚手のジャンパーを着ての釣りとなりました。お盆頃は大変沢山の釣り人がサケ釣りに集まっていますが、もうこんな釣り人はいません。私が好きなカレイ釣りが良くなる時期です。とは言え、暑い盛りにカレイが釣れないのかと言えば、そんなことはありません。ただ私の竿にはかからないだけです。今日のおかずに、そして少し余れば冬の飯寿司

用にと、思いながらあちこちと歩き回るので、さっぱりカレイの当たりがありません。もう昼近くです。腹も減ったなー！と思いながら竿を振ると、やっと小型のカレイが釣れてきました。小さくてもないよりはましと、キープ。更に同じようなカレイがもう1枚。再度竿を振ると今度は強い当たりが！猛烈な引き！もしやタンタカか？とっていると、上がってきたのは大きなカワガレイでした。いつもなら放してくるカワガレイですが、今日は「これを刺身に！」とキープ。そして同じような大きさのカワガレイがもう1枚。これで最後にしようと思いながら投げた竿にやっと大きなクロガシラが。これを持ち帰るために絞めている間に置いていた竿にもう1枚。でやっと釣果らしくなったところで終了しました。この2種類のカレイを並べて写真に撮りましたのでご覧ください。黒い側を上にして腹を自分の方に向けるとクロガシラは頭が右に来ますが、カワガレイは頭が左を向いていますね。このカワガレイは北太平洋に広く分布していますが、アラスカまで行くと左向きの方が多いのだとか。なぜかは不明です。



カワガレイとクロガシラガレイ

9月29日に見たエゾシカの写真を載せてみました。大きな雄のエゾシカです。角の先端が白く光っていますね。袋角の中で硬く鋭い角が完成すると、自分で角の皮をむきます。こうすると中から鋭い角が出て来るのです。そして今度はこの角を立木などにこすりつけてさらに鋭くしていきます。角の皮が剥けたばかりの時は、まだ血の色が付いているため真っ赤です。この赤い角は半日もすると角を木にこすりつけるため白っぽくなります。さらに時間がたつと、白いのは先端だけであとは褐色がかって見えます。これは木の皮から出るタンニンが付くためでしょう。角が大きなヘラジカやトナカイの赤い角は見事なものです。この写真の個体は9月29日に見ましたか

ら、この時期からシカが交尾期に入ったと言うことでしょう。この時、雄は1頭の雌について歩いていましたから、この雌も発情しているのでしょうか。「奥山にモミジ踏み分け 啼くシカの 声聞くとときぞ 秋は悲しき」と詠われているように、発情期の雄はちょっと悲しげに聞こえる「ミュー」と聞こえるような甲高い声を出します。でも私は動物園で飼育下のシカの声は聴いたことがあります、自然界ではトンと記憶にないほどに聞いた覚えがありません。私が動物園にいた当時はエゾシカの他にヨーロッパアカシカとワピチ（アメリカアカシカ）が飼育されていました。体の大きさはワピチが最も大きく、ヨーロッパアカシカはエゾシカとワピチの間ほどの大きさです。でも啼き声はエゾシカがもっとも高い声で啼き、ワピチは体が大きいので声も大きいのですが、エゾシカに良く似た声で鳴きます。ところがヨーロッパアカシカはこの2種とは違い低い声で、牛の声に似ていますが「モー」と濁らずに啼くのではなく、「グオー」と濁った低い声で啼きます。声だけでもこんな違いがあり面白いものだと思います。「奥山に…」と詠った歌人はやんごとなき身分の貴族でしょうから、自分で山に行って聞いたのではなく、屏風絵を見ながら詠ったのでしょうね。



角が尖ったエゾシカ

釧路にいと秋が来ても「収穫の秋」とか「でき秋」とかいう感じが全く感じられませんね。と言うことで十勝方面に行ってみました。豆やジャガイモの収穫作業をしているのが見えるのは、いかにも収穫の秋ですよと言っているようで、私には新鮮な感動でした。空にはガンの大群が十勝川河口方面から畑の多い方向へと次々と飛んでいきます。こんな景色も釧路ではあまり見られませんね。この日私が見たガン類はヒシクイ、マガン、シジュウカラガンなどですが、シジュウカラガンは飛来数

がずいぶん増えたようで、どこでも普通に見られるようになりました。十勝川河口橋ではガン類の他にウの群れも上流へと飛んでいくのが見られましたが、ウはガン類とは違ってばらばらに飛んでいきます。ガン類は遠くでなくても編隊を組むことが多いように見えるのは面白いですね。

〔五七五〕
遠目にも璃花子の透ける広背筋
トラベルがトラブルとなる上限値

〔七言絶句〕

混沌 残暑一転朝夕寒 蛸鳴姿探索困難 同様病原体不可 予兆東京再拡散	銀幕 渋谷界限小劇場 趣味的映画好評 座席少数両隣近 発咳心拍数上昇
--	--

（札幌市 頑黒和尚）

〔句題〕 霜

「霜の花
朝日に焼かれ」
消えにけり」

「電柱の
影の長きや霜の跡」

「寄道よりみちの霜柱踏むとうろうし登校子」

（室蘭市 白波瀨 稔歳）